

26PB-am225

薬学部一年生が考える薬剤師のコミュニケーション能力

○竹平 理恵子¹, 佐田 宏子¹, 山村 重雄¹ (¹城西国際大薬)

【目的】本学では、一年生に対して模擬患者 (SP) 参加型演習を実施し、薬剤師と患者のやりとりを体験させている。演習前後のレポートから、薬学部一年生が薬剤師のコミュニケーション能力についてどのように考えているかを考察した。

【方法】2014年4月に入学した学生163名を対象に演習を実施した。場面設定は保険調剤薬局とし、SPを相手に薬剤師として処方せんの受付と薬剤交付を体験させた。演習の前後に、“薬剤師に必要なもの”と“その理由”を、レポートに記述させた。記述内容から意味のある文章を抽出した後、テキスト解析により、用語の分類と用語間の関連性を解析した。

【結果】演習前後のレポートから、それぞれ、231件、323件の文章が抽出できた。薬剤師に必要なものとして「コミュニケーション能力」が記述された割合は、演習前は約45%、演習後は約30%であった。「コミュニケーション能力」が必要な理由として、演習前は『患者対応』『薬の服用』に関連する用語が主であったが、演習後は『心情を理解』『症状の把握』に関連する用語が増加した。『情報収集』『情報提供』の記述は、演習前後で大きな変化はなかった。

【考察】演習後、抽出した文章の件数が増えたことから、SPとのやりとりを経験することで、薬剤師に必要なものが明確化することができたと考えられた。演習後、文章内に「コミュニケーション能力」が含まれる割合が減少したが、薬剤師に必要なものを別の用語で表現したことが一因と考えられた。必要な理由の記述から、演習前は薬剤師側からみたコミュニケーション能力に焦点が当たっていると考えられた。演習後は患者のことを知ろうとする用語が増えており、患者中心を意識したコミュニケーション能力の必要性を認識したと考えられた。